

常務会紛糾す

咲村
観

講談社



常務会紛糾す

咲村 観

講談社

常務会紛糾す

定価 九八〇円

第1刷発行 昭和55年8月25日

著者 咲村観

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京8-3930

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© KAN SAKIMURA 1980 Printed in Japan

常務会紛糾す

目次

第一章 汚職の構図

取締役就任 7

贈賄発覚 18

受難 37

国会喚問 55

相剋 62

死闘の果て 71

第二章 経営者とは

経費節減 89

労働組合対策 113

事業開発にかける夢 122

第三章 悪の華

執	無	激
念	情	論
163	149	130

灼熱の国
173

苦闘
176

南十字星
185

制圧
194

忍び寄る魔手
207

クウェートへ
211

あとがき
219

装丁／小高辰也
写真／長野正隆

第一章 汚職の構図

取締役就任

御堂筋の並木に夜の帳とまりがおりはじめる。

さわやかな風に木々の葉が揺れ、その黒々とした連なりが、絶え間なく往き来する車のヘッドライトの光芒こうぼうのなかに浮き彫りにされて眼に映る。

十二階建の東邦物産本社ビルの八階には灯がともっている。

建物の巨大なシルエットが、その明かりに映はえて浮かんでくる。

無気味ささえ感じさせる佇たたずまいである。

附近のレストランで夕食を取った沢木は横断歩道の端に立ってその姿を眺めていた。

今日は五月末の重役会の最後の日である。

六月の定時株主総会で新たに選任される取締役の氏名

はもう決まっているはずだとの想いがよぎってゆく。

同期入社のライバル四人のうちから二人というのが社内社内の噂である。

野村、小島、坂本に沢木を加えた二十八年組の部長は現在揃って本社勤務になっている。

人事異動の結果による偶然とは思えない要因が、この現象のなかには隠されている。

いままで勤務場所も仕事も区々であった四人が、三年前期せずして大阪本社で顔を合せたとき、お互いがそれを感じていた。

重役コースを歩む者を決めるための最後のテストのためなのだ。

経済の高度成長期に新設された建設部の二代目部長に、沢木が就任したのは四十六年十一月であった。

各企業の設備投資ラッシュに乗って、それ以降の一年半は稼ぎまくった。

住宅、マンション、ビル、工場、公共施設と、建設会社とタイアップして実施した工事は数限りない。

しかも、そのすべてが高利潤の成果をもたらした。

人事部長の野村や、短繊維第一部長の小島、車輛鋳鍛部長の坂本などが平穩な勤務に終始したなかにあつて、沢木の活躍はひととき目立った存在であった。

業績に対する貢献度こうけんどが人事考課を決める主因になる社内社内の慣わしから、沢木はこの時点で同期のライバルに

水をあげ得たと信じていた。

だが、好事は長くは続かなかった。

四十八年後半に突如襲ってきたオイルショックが、すべてを狂わせてしまったからである。

建設資材や人件費の高騰による建設物価の上昇、設備投資ブームの終息、構造不況の到来などが、営業基盤拡充の途上にあった建設部の業務をずたずたにひきさいてしまった。

沢木や、部下の伊藤建設課長、横山資材課長は必死の努力をして、たて直しをはかったが、時代の流れだけは如何ともなしがたかった。

一年余を経た現在でも、その状態は変わらない。

受注工事先細りの状態が今後もつづくと、歴史の浅い建設部は、不動産部などとともに「営業不振の部」として取りつづしに遭うかもしれない。

最近、沢木たちの努力により業域拡張が軌道に乗りはじめたものの、見通しは依然暗かった。

「俺は取締役にはなれないかもしれない」胸のうちでそうつぶやきながら、沢木は信号が変った横断歩道を渡った。

本社ビルの玄関を入ると、エレベーターで八階へあがり、人の気配のない廊下を歩いて事務所へ入った。

四百五十坪のフロアには、残業者が六十名ほど見られるだけである。

しかも、その半数が部課長である。

窓際の部長席には、野村や小島、坂本の顔も見える。

三人とも黙然と椅子に背をもたせている。

仕事のことを考えているのではなく、特別会議室で行われている役員会の結果を待っているのである。

経費節減のため、不要箇所の蛍光灯が消された事務所内は薄暗い雰囲気である。

そのなかで部長席の並びの周辺だけが、普段の明かるさを保っている。

部長たちは、重役会で審議されている関係議題の採否の結論を聞くために待機している。

それと、役員たちより早く退社することに後ろめたさを感じているからでもある。

蛍光灯の明かりに映える野村の精悍な顔が、網膜を刺激するのを感じながら、沢木は中央の通路を自席に向かつて歩いた。

「野村だけは確実に取締役にになる。」

社内における序列も俺よりうえだし、仕事上のマイナスもない。要領がよく、ソツもないため、清水社長からは特に目をかけられている。問題はあとの三人のうち、誰が残された一つの椅子を射とめるかだ。

小島や坂本に、勤務成績や能力において劣るとは思われない。

だが、構造不況による担当業務の不振は、やはり心に

かかる。

今年を逃がしたら、取締役の法定任期から次の機会は最低二年後になる。

その間にもし通常以上の営業成績をあげ得なければ、二十九年組や三十年組の優秀者に先を越されてしまう。そうなれば、停年まで部長職でとどまらなければならぬ。

部長にもなれない多数の同期生のことを考えれば、それで満足とも云える。

しかし、ここまでこぎつけた以上は石にかじりついても役員にならなければ……
頭のなかを思いが走るのを覚えながら、自席に坐った。

気持を和らげるためにポケットから煙草を取り出し、ライターで火をつけて吸った。

入社以来はじめて味わう、不安と緊張の入り混った複雑な心境である。

右手のつい立てで区劃された区域から、野村と総務部長が立ちあがった。

二人は、並んで九階への階段をあがっていった。

奥の特別会議室で行われている役員会は、もう終わった頃だと判断したからであらう。

沢木は視線をもどすと、通路を隔ててスチール机が縦に並び、建設課と資材課の残業者を眺め渡した。

伊藤建設課長と山田資材課長代理が、それぞれ主席課員と仕事上の打ち合せを行なっている。

業務不振の折のせい、部下たちの話し振りに活気が見られない。

昭和四十七年頃の雰囲気とは雲泥の差である。

溜め息を洩らすと、沢木は腕組みして椅子に背をもたせた。

両隣りの河原穀物油脂部長や、村岡海外事業部長は席にいない。

二十四年卒の二人は、四年前に取締役に就任しているため、今日も朝から役員会に出っぱなしである。

毎月のことであり、沢木は意に介さなかったが、部長兼務の取締役に席の配置上はさまれると、さすがに重役会の動静を意識する。

昇進期を迎えた昨今は特にそれが強い。

「さあ、そろそろ引きあげようか」

「そうだな。重役さんはゆっくりだから待っていても仕方がない」

どこからともなく会話が聞こえてくる。

昼間の喧噪がうそのような静まり返った社内的情景である。

時折鳴る電話が、耳目をそばだてる。

小島が席へ近づいてきた。

中背細身の、おっとりしたタイプの男である。

「俺はもう帰るわ」

心のうちを隠した、さり気ない口調である。

「俺もそうしよう」と沢木は相づちを打った。

昇進のことは考えても仕方がないと心のなかで思い直した。

「落ち着いたら、四人で呑みにでも行こうか」

「そうだな。いつまでもいっしょに本社におれるとは限らんからな」

自分でもほんとうにそんな気持であった。

小島は、便所へ立っていった。

会話のぎこちなさを二人は感じていた。

普段であれば横の椅子に坐って駄弁^{だべん}つてゆくのが慣わしなのに、今日はそれが見られない。

うつむき加減に歩く小島の後ろ姿を眺めながら、沢木は立ちあがった。

ロッカーをあけて背広の上衣を取り出したとき、九階への階段から賑やかな話し声が聞こえてきた。

部長たちが、一斉に立ちあがる。

緊張した雰囲気の一瞬のうちに変わってゆく。

二十五名の役員が、次々に事務所へ姿をあらわした。

皆はっとした表情である。

株主総会を控えての重要議題が決定を見たからであらう。

河原部長や村岡部長も席へ帰ってくる。

「なんだ沢木君、もう帰るのか」

河原部長が冗談を飛ばしてきた。

頭の禿^はげがあがった、ひょうきんな顔である。

「はあ、今月の提出議題はわたしの部ではなかったもんですから」

「なるほど。しかし、別の案件があるじゃないか」

部長はさりげなく云って、長身の沢木を見上げた。

「なんのことですか」

面長の端正な顔に血がのぼる。

沢木自身も、それを感じていた。

「まあいい、いずれわかることだから」

部長は独り言のようにつぶやいて、顔をほころばせた。

左隣りの村岡部長も笑みを浮かべている。

二人の気配から、沢木は自分が取締役に選任されることになったことを悟った。

しかし、正式の通知があるまでは樂觀は許されない。

野村が足早に席へやってきた。

沢木と同じくらい長身で、眼つきが鋭い。

「おい、岸本常務が呼んでいるぞ。すぐ行ってこい」

野村はいつもの人を喰った口調で、そう沢木に告げた。

高圧的な姿勢が心にささったが、いまはそのことを考えている余裕はなかった。

上衣を着ると、野村のあとを追って役員室への廊下へ入っていった。

岸本常務の部屋へ入り、応接椅子に坐って話を聞いた。

「実は、欠員になっている取締役の補充の件が決まった。常務会の決定では、現在のままとすることになっていたが、今日の役員会で再検討の結果、内務担当の川島専務の意見を入れ、二十八年組のなから一名だけ選任することに決まった。

ところが、その人選について意見がわかれ、野村君か君かでもめた。

社長の裁決で野村君に決まりかけたところへ、加納副社長から横槍が入り、二八組は優秀者が揃っているから二名にすべきだとの強硬な申し入れがあった。副社長は常務会でも同じ考えを述べていた。

自分が人事課長時代に採用した二十八年組に肩をもつ気持はわかるが、あれじゃ個人人事と同じだ。まあ、そのことは別にして、ほかの重役たちのなかにも副社長の意見に賛意を表する者があらわれ、最終採決をとった結果、一票の差で副社長の考えがとおることになった。

そんなことで、結論的に野村君と君が取締役に選任されることになったわけだ。

おめでたいことだが、考えてみれば君はラッキーな男だよ。担当業務が不振なのに役員に選任されるなど、わ

れわれの時代にはとても考えられぬことだったからな」常務はそこまで語ると、一息入れて煙草を吸った。眼元にはかすかにあざけりの笑みが浮かんでいる。君なんか役員になれる器ではないと云いたげな表情である。

沢木は視線を落とし、眉間にしわを寄せた。

さきほどの喜びの気持は、どこかへ吹っ飛んでしまっていた。

「とりあえずそのことだけを伝えておく。細部は明日川島専務から、従業員としての退職金の支給や役員報酬のこと、これからの勤務の心得などと併せて通知があるはずだから」

「そうですか、わかりました。これからは一生懸命頑張るつもりですので、よろしくお願いします」

沢木は重い口調でそう答えた。

常務室を出ると、秘書や総務課長が忙しそうに往き来る廊下をゆっくり歩いた。

不思議に雑念は去っている。

とにかく人生の岐路を無事乗り越えた気持であった。事務所へ出たところで、小島と顔を合せた。

「おめでとう、よかったな」

「いや、運がよかっただけだよ」

沢木は照れて答えた。

小島の胸のうちを察すると、喜ぶ気持にはなれなかつ

た。

二人は、そのまま別れた。

小島は足早にエレベーターホールへ消えていった。

寂しさをたたえた、その後ろ姿が心に残った。

自席に帰ると、机のうえや引き出しを整理した。

転勤の辞令を受けたときの心境であった。

河原部長や村岡部長は、すでに退社している。

他の部長席にも殆んど人影が見られない。

役員室附近も、いつの間にか静まり返っていた。

自分を避けて出口へ向かう坂本の慨然たる表情が視覚

をよぎってゆく。

気の毒だとは思ったが、已むを得ぬことと考えなければならなかった。

立ち上って課長席へ行き、伊藤と山田に声をかける

と、エレベーターホールへ向った。

岸本常務の言葉が、ふと脳裏に浮かんてくる。

船場商人を彷彿させる、アクの強い笑顔が反抗心をか

きたてる。

「戦前の入社者とわれわれと、いずれが秀れているかは

やがてわかる」

心でそうつぶやくと、胸を張った。

野村が笑みを浮かべて、自分を見詰めていたのを沢木

は知っていた。

六月一日の朝刊に、東邦物産の当期純利益と役員人事が会社欄に発表されていた。

利益六十二億円、前期比マイナス十八億円、配当は一

割据え置き、取締役人事部長野村耕平、同建設部長沢木

健治と記載されてあった。

チャイムが九時を打つと、申し合せたように各社から

電話がかかってきた。

祝いの言葉を述べ、今後の厚誼を依頼するものが殆んどであつた。

なかには、粗品を送らせてもらったからと告げる者も

いた。

建設業者、機械、電機メーカーなど、現在の所管業務

に関係のある会社からが主であるが、航空機販売、輸入

油飼糧、輸出繊維ほか、過去に沢木が担当していた業務

関係の業者からのものも多かった。

役員に就任するだけで、これほど人々の注目を浴びる

ことに沢木は驚いた。

商社を中心に、網の目のように張りめぐらされた商売

の機構の複雑さを改めて感じさせられた。

勤続二十二年、四十五歳で取締役に就任というのは、

大学の同期生のなかでもトップクラスの昇進に属する。

各業者はその辺を考え、自分を東邦物産のホープの一

人と見ているのかもしれない。

しかし、社内の実態はそんなものではない。取締役と

云つても、部長に毛が生えた程度の存在に過ぎないのだ。

むしろ今後は、最下級の経営者として常務以上の重役たちにあごで使われ、怒鳴られ、昔の軍隊のような厳しい戒律に喘がなければならないのである。

精鋭の集まりであるだけに、そこで展開される自己防衛の闘いは、これまで以上に熾烈をきわめることになる。長年の本社勤務の経験を通して、沢木はそれを知っていた。

ライバルの野村や仕事上同じ系列に属する岸本常務、肌が合いそうにない清水社長や古沢副社長、森田専務などの顔が脳裏をよぎってゆく。

重役会も、所詮は人間社会なのだ。しかも、最も競争の激しいみにくい社会なのだと思う。

ひとしきり鳴った電話が下火になった頃、秘書が祝電をもってきた。

沢木はそれらを丹念に見たあと、机のひき出しにしまった。

伊藤課長や横山課長、ほかの部長たちも祝いの言葉を述べにやってくる。

だが、坂本だけはどうとう姿を見せなかった。予想されたことではあるが、やはり心に残った。

定時株主総会は、六月二十七日に開催された。

朝、いつもより早目に眼をさました沢木は、洗顔をすませると自宅の庭を散歩した。

阪急宝塚線の「売布神社」駅から、山手へ十分ほど歩いた高台にあるこの家は見晴らしがよい。

周辺の山々の緑が心を和らげてくれる。

敷石のうえに佇んで、深呼吸をした。

落ち着いた心境である。

今日から役員の一員に加わることについての感慨は、不思議に湧いてこない。

これからの仕事に対する抱負も、いまは持ち合せていない。

すべて今後の重役会の動静を見たうえで判断しようと考えていた。

売布神社の森から、うぐいすの鳴き声が聞こえてくる。いつものことながら冴えた音色である。

梅雨期に拘らず、空は晴れあがっていた。

澄んだ空気と静けさが、さわやかな気持を誘う。

眼の前の池では緋鯉が数匹ゆったり泳いでいる。

なんの屈託もない姿である。

ここに住みついて、早三年が経とうとしていることを

沢木は思い起こしていた。

朝食は、一家四人揃ってとった。

今年地元の大学に入った伸一が話しかけてくる。

「お父さんも、いよいよ重役か。なんだか信じられない

いな。ついこの間までは、サラリーマンはうだつがあがらんと文句ばかり云っていたのに」

日焼けした顔から白い歯がのぞく。

「なにを云うとるか。それは昔のことだよ」

最近の伸一の成長は、眼を見張るものがある。

大学へ入ってから、それが特に目立ってきた。

「今後はうかうかしていると、やられるかも」冗談で返しながら沢木はそう思った。

「お父さん、重役さんになったお祝いににかおごつてよ」

中学三年生の順子が眼を輝かせて云う。

茶目ッ気たっぷりな表情である。

「考えておこう。しかし、来年はお前も高校だし、遊ぶことばかり考えていると試験におっこちるぞ」

「そうよ。それにいまは期末テストの最中なんだから」妻の豊子が、いつもの調子でたしなめる。

四十一歳の年齢のせいかな、若い頃より一廻り肥えて、主婦らしい貫禄が備わっている。

順子はそれ以上言葉を返さなかった。

食事が終ると、子供達は慌しく玄關を出ていった。

その張りのある声を聞きながら「これで家のなかもようやく落ち着いてきた」と沢木は思った。

豊子が用意してくれた新調の背広に着替えて、家を出る。

坂道を降り、池のほとりを通って駅へ向って歩いた。
「今日から俺も役員か」ふと、そんな思いがよぎってゆく。

会社へ着くと、清掃された玄關を入っていった。

「第八十七期定期株主総会会場」と書かれた看板が大理石の太い柱に立かけてある。

社員たちは、それを物珍しそうに眺めながらエレベーターホールへ向かう。

やはり普段と違う雰囲気である。

八階の事務所に入ると、総務部長以下の総会運営関係者はすでに出社して、忙しそうに立ち廻っていた。

自席に坐ると、心を落ち着けるために煙草を吸った。

十時半になると、総務課長が従業員株主として出席予定の課長クラス以上の者に会場への参集を告げて廻る。

部課長たちは次々に立ち上って、九階の大会議室へ向った。

十一時十分前になると、役員室の廊下から清水社長、岡島会長以下の役員が秘書に先導されて姿をあらわした。

沢木は河原、村岡両部長とともに椅子を立ち、序列に従ってあとにつづいた。

従業員たちが仕事の手をとめて、その姿に見入る。

九階への階段をあがり、廊下を歩いて、突き当たりの会場へ入った。

さすがに緊張した気持になる。